

高度経済成長期のホテルと民藝運動——大阪ロイヤルホテルに着目して

遠藤太良（京都大学）

明治維新を経て誕生した我が国のホテルは、その設立当初、外国人観光客を呼びこむことを目的としていた。しかしながら、時代が下り地方にも普及していく中でその役割を変遷させ、西洋的な趣向のみならずその地域の特徴を取り入れるなどしていった。そして、その過程では美術作品もまた重要な役割を演じてきた。

ホテルと美術のこうした関係を考える上で注目されるのが、1965年、「関西の迎賓館」として大阪・中之島に開業した大阪ロイヤルホテル（現リーガロイヤルホテル大阪ヴィニエツトコレクション）である。このホテルには、民藝運動の中心人物であった陶芸家バーナード・リーチが着想し、河井寛次郎や棟方志功などの作品も多数展示されているバー「リーチバー」が、創業当初より設けられている。それ故、本発表では、リーチバーを中心に大阪ロイヤルホテルを取りあげ民藝運動との関係を考察する。このことにより、高度経済成長期のホテルにおいて民藝運動をはじめとする美術が果たした役割を詳らかにしていく。

まず、大阪ロイヤルホテルについて、リーチバーを中心に、吉田五十八によるこのホテルの建物全体も踏まえつつ、その特徴を考察する。続いて、当時の社会情勢や民芸運動を巡る評価などを検討する。その後、大阪ロイヤルホテル創業当時の社長であり、民藝運動の有力な支援者でもあった山本為三郎の言説などを分析していく。

以上の考察をとおして明らかとなるのは、以下の二点である。

まず一点目は、民藝運動の関係者らの作品を使用することにより、国外のVIPと当時増えつつあった国内の中間層という相異なる対象を同時に獲得しようとしていたことである。河井や棟方が国際的に高い評価を獲得するなど、戦後において、民藝運動は海外にも知られている代表的な日本の芸術の一つであった。同時に、国内においても民藝の作品は格式ばらないその様相から幅広い層の支持を得ていた。こうした理由により、国外のVIPと国内の中間層のどちらにも評価の高い民藝運動が選ばれたのである。

二点目は、東京とは異なる「関西らしさ」を演出しようとした点である。山本は民藝運動の支援者であると同時に、「朝日麦酒」の社長を務めるなど、関西を代表する実業家の一人であった。民藝運動が人気を博していたとはいえ、それと関連したホテルは東京にもなく、また、民藝運動の反中央的なあり方は大阪に代表される関西とも共通するものであった。これらのことから、山本は地盤沈下著しかった関西の地位向上を視野に入れつつ、リーチバーなどを設けたと考えられる。

ホテルと美術の関係についての研究は、その建築の意匠に関するものを除いてはこれまでほとんど行われてこなかった。本発表は、意匠の分析に留まらず当時の社会状況や関係者の言説の分析などをとおして、ホテルに象徴される観光業と美術との結びつきを詳らかにすることから、美術史学と観光学の双方において重要な意味を持つだろう。